1.本町通りにあったゲーテ座　2.ブラックを三遊派にスカウトした五厘（初代橘家圓之助）　3.ブラックの名がみえる番付　4.伊勢佐木町にあった新富亭　5.英国実話「みなしご」表紙　6.「快楽亭ブラック」（イアン・マッカーサー著　内藤誠・堀内久美子訳、1992 年）表紙とその中にある役者姿のブラック　7.ブラック高座姿のスケッチ　8.「富竹亭」（横浜馬車道）　9.初代浪花亭愛造　10.グラモフォンのガイスバーグ　11.寄席「久本」（御徒町）のビラ　12.ブラックの養子のホスコとその妻ローザ　13.ブラックの墓

# 特集 明治時代に活躍した“元祖 外タレ” 快楽亭ブラックの人生

カセイジン

**現在、日本の芸能界では外国人タレントは当たり前の存在になっている。いわゆる外タレの元祖を考える時、横浜とゆかりのある落語家、「快楽亭ブラック」という名前に行き当たるが、この人の名前は 1980 年代から流行った漫画「美味しんぼ」に出ているくらいで、それも月日の流れとともに忘れられかけている。現在、快楽亭ブラックを名乗っているハーフの落語家がいるが、初代の快楽亭ブラックとの関係はない。開国後まだ間もない明治時代の日本社会で、落語家、役者、奇術師、作家 etc. として活躍した“元祖 外タレ”のブラックはどんな人生をおくったのだろうか？**

## 快楽亭ブラックの寄席姿

神戸クロニクルの記者は、寄席で見たブラックを次のように描写している。「…ブラック氏は想像通り日本人離れしている。がっちりとして、太り気味・血色がよい。声は並外れて力強く、朗々としている。彼はあらゆる階級の日本語の弁を会得している。彼の芸は西洋人にも日本人にも驚歎に価する。眼をつぶって耳をすますと、日本人が話しているのではないとは外国人には及びもつかないし、日本人もその判断はむずかしい位だ。」（下記、参考文献 No.7 の（二）より引用）外国人でありながら、子供の頃から日本で育ったブラックの日本語は相当達者だったのは間違いない。

← 正座するブラック。出典「参考文献」No. 6。椅子に座って話すことも多かった。

Copyright© 横浜歴史さろん Yokohama History Salon. All Right Reserved.

## １．ブラックの生い立ちと家族

快楽亭ブラックこと、**ヘンリー・ジェームズ・ブラック**（Henry James Black）は、オーストラリアの北アデレード市で 1858（安政 5）年 12 月 22 日に生まれた。彼の父であるイギリス人、**ジョン・レディ・ブラック**(John Reddie Black)は、横浜に 1863（文久 3）年にやってきて、その後、「ジャパン・ヘラルド」紙の編集長となり、名の知られたジャーナリストとなった。その父を追って、ヘンリーと母は 1866（慶応 2）年横浜に上陸した。

**父ジョンは著名なジャーナリストであるが、テノール歌手としての一面も持っていた。**日本での活動は、1864（元治元）年 7～9 月に、滞在していた居留地 53 番の隣の倉庫での音楽会から始まり、たびたび音楽会への出演や独演会の開催をしていて、亡くなる年の 1880（明治 13）年 5 月まで出演記録がある。母もピアノ伴奏をしていたという。ヘンリー・ブラックのエンターテイナーとしての血は、父親から受け継いだものと思われる。その父は、大著「ヤング・ジャパン」の完成を見ずに 1880（明治 13）年 6 月、脳溢血にて 53 歳で亡くなった。

**母、エリザベス**(Elizabeth Charlotte)は、上流階級の英語教師をしたり、イギリス聖公会の熱心な信徒で小笠原諸島の伝道事業にも関わったりしたという。1922（大正 11）年に亡くなった。ブラックの唯一の理解者だった。ブラックもその翌年に亡くなっている。

**妹、ポーリン**(Elizabeth Pauline)は、福澤諭吉など、上流家庭の英語教師をしたり、キリスト教の伝道をしたりした。生涯独身で、1945（昭和 20）年に死去した。兄ブラックを嫌っていて、母の死を兄に知らせず、ブラックは、後から、これを知り、号泣したという。

**弟、ジョン・レディ 2 世**は、1867 年生まれ、イギリスで学び、サミュエル商会に入社。1890（明治 23）年に神戸、翌年横浜に赴任した。キルビー商会の経営者で、横浜の外国人社会の重鎮といわれた人物の長女と結婚し、のち神戸に移り、神戸クラブの会長を務めた。1929（昭和 4）年に死去し、神戸、春日野墓地に眠っている。この弟については、際立ったエピソードがある。兄の芸人活動に反対だった彼は、1895（明治 28）年 10 月、口演中の兄を罵倒し、経済的援助をしてくれている英国の叔父に言いつけるなどと言い、**舞台から引きずり下ろした事があった**と伝わっている。

父親が息子の芸能活動をどう思っていたかはわからないが、弟妹には嫌悪され、不仲だった。

ブラックが初高座を行った寄席「富竹亭」（横浜馬車道）

## ２．演芸との出会い

1869（明治 2）年、11 歳のブラックは、あるガーデンパーティーの余興で、蝶使いの木下の芸を見る（「木下」に関する詳細は不明）。この時、舞台によばれて、コツを教わり、**15 秒ほど蝶を飛ばした**という。それがブラックの演芸との出会いだったらしい。

彼の自伝によると、当時の**攘夷運動の中でのエピソード**があり、母と米国公使の家族と馬車で角筈の十二社へ遊びにいった時、刀を抜いた 2 人の武士に囲まれたが、役人が取り押さえてくれたことや、父に命令されて、横浜に新聞用の紙を調達にいった帰り、夜道で侍に後をつけられたが、横浜に着いて事情を聴くと護衛

Copyright© 横浜歴史さろん Yokohama History Salon. All Right Reserved.

してくれていたことが分かったと語られている。父親は、その頃、西郷隆盛、板垣退助、後藤象二郎、河村謙三郎、その他の名士たちと親しく交際しており、江藤新平が、よく家に来ていたという。ブラックが政治演説を行うようになったのは、そういう人たちの影響があったのかもしれない。

1876（明治 9）年、父が上海に拠点を移し、母をともなって出国後、父の友人の退役海軍将校 堀竜太の仲介で、浅草の芳川亭において、手品師 柳川一蝶斎の一座の**西洋手品師として初舞台を踏んだ**。1878（明治 11）年、講談師 松林伯円の一座で、**横浜随一の寄席、富竹亭に出演**。寄席の経営者、竹内竹蔵の目に止まり、当時の巡査の給料の 10 倍の出演料で、馬車道の清竹亭の初席（15 日間）に出る事になり、**「チャールズ１世伝」**、**「ジャンヌダルク伝」**を語り、人気を博した。1879（明治 12）年、横浜元町物産陳列所で**政談演説**をする。1880（明治 13）年、横浜―小田原間の東海道本線沿いの駅で、国会開設請願運動、自由民権、徴兵制反対の**政治演説**をする。同年、放牛舎桃林の一門に加わり、**軍談**（軍記物を節おもしろく読み聞かせること）をした。

しかし、1886（明治 19）年には、家族や知人たちの猛反対を受けて、芸人を辞め、英語教師に転身することとなったが、その一方、翻案物の講談を出版していた。

## ３．英語教師としてのブラック

芸人をやめたブラックは、宗十郎町（今の銀座七丁目 5～6）で英語学校を開いた。これには、母や妹も賛同して、２人とも同校の教壇に立ったという。また、ブラックは、同校の教科書に使われたと思われる 100 ページの「容易独修英和会話篇」を 1887（明治 20）年に中外堂出版より発行した。同書の第二部の会話篇には、**訳語の語尾が「～ござりやす」調**であることや、例文に以下のような演劇論があることなど、のちに、ブラックが、役者をすることを予感させる。

ブラックが出版した英会話本。
出典「参考文献」No. 6

Whom do you consider the best actor Tokio?　**汝ハ東京デ第一等ノ俳優ハ誰ダト思ヒマスカ**

Danjuro is certainly the cleverest. **團十郎ガ請合テ一番巧者デス**

I do not agree with you, I prefer Kikugoro's acting.　**私ハ汝ト御同意セズ寧（ムシロ）菊五郎ノ動作ヲ好イト思ヒマス**

## ４．芸人に復帰

しかし、１年ほどで、英語教師を辞めたブラックは、友人の五代土橋亭里う馬に誘われ、三遊派の寄席に出演。さらに、**三遊派の正式メンバーとなり、1891（明治 24）年、真打落語家快楽亭ブラックを名乗る**。1893（明治 26）年、菓子商石井みねの養子となり、**帰化し、石井貌刺屈**となる。これは小泉八雲より 4 年早い帰化である。みねの養女であるアカと結婚し、妻の助けを得て、今でいうコピーライターの看板もあげたというが、数年で離婚したようで、2 人の間に子供はいない。

ブラックの名前が載っている寄席「久本」（御徒町）のビラ。出典「参考文献」No. 6

Copyright© 横浜歴史さろん Yokohama History Salon. All Right Reserved.

ブラックは、催眠術師としても活躍していて、1896（明治 29）年 10 月の横浜毎日新聞に記者の前で、3 人の子供に催眠術をかけた様子が、３回に渡って掲載されている。

ブラックの弟子・養子、ホスコ（右）、
ホスコの妻ローザ（左）出典「参考文献」No. 4

『落語家人名録伝』によると、ブラックは全盛期には、養子のホスコ（西洋手品師）を筆頭に、6 人の弟子をかかえ、一時期は、弟子たちを率いて、コミックバンドをしていた。

**養子のホスコは、純粋の日本人**で、本名は石井清吉。1903（明治 36）年頃には、奇術の松旭斎天一門下となり、天左となった。**ホスコの夫人は、ローザを芸名とする青い目の義太夫語り**で、フランスから横浜に渡ってきて、横浜のフランス人女学校を卒業し、日本人の養女になり、女弁士若柳燕嬢の口上でデビューしたという。ブラックはべらんめぇの変な外人といったキャラで明治 30 年代までは活躍の場が多かったが、その後は人気が落ちて、息子夫婦の一座に加わっていた。

幡随院長兵衛に扮するブラック（左）、
『妹背山婦女庭訓』三段目「吉野川」で雛鳥（女形）
を演じるブラック（右）。出典「参考文献」No. 6

## 5．役者としてのブラック

役者ブラックは、1892（明治 25）年、講談師連中の芝居で「鈴ヶ森」の長兵衛をやってほしいと、松林伯知と初代大林伯鶴に頼まれて出演したのが最初という。**日本語は、話すのは達者だが読めないので、ローマ字に直してもらった**台本で、ブラックが長兵衛のセリフを覚えている時、中村勘五郎が来て、いろいろの型を教えてくれたとか、中村芝鶴は、鏡台を貸してくれたり、男衆を一人付けてくれたりしたという。1894（明治 27）年、本郷の春木座（本郷座）で、**幡随院長兵衛**を演じた際、江戸歌舞伎の宗家、九代目団十郎にも教わったという。1891～99（明治 24～32）の間、多くの舞台に立っていた記録が残っている。

## 6．レコーディングプロデューサーとしてのブラック

ガイスバーグ

1903（明治 36）年 1 月に**英国グラモフォン**（現、ユニバーサルミュージック）の米人技師**フレッド・W・ガイスバーグ**（Gaisberg）が 1902（明治 35）2 月～翌年 8 月、アジアを出張録音して回った。横浜には、1903（明治 36）年 1 月 16 に上陸。2 月 4 日から、ホテルメトロポール（東京築地明石町、現、聖路加ガーデン）の一室で、レコーディングを行った。ブラックの仲介で、三代目小さん、初代円遊、初代円右、四代目円喬、五代助六（三代志ん生）、六代むらく、初代小遊三（六代円太郎）らが SP レコードを残した。

ブラックのレコードには、以下のものがある。片面で、1 分半～3 分くらいの収録時間であり、すべて、**CD「全集・日本吹込み事始め」**に収録されている。

Copyright© 横浜歴史さろん Yokohama History Salon. All Right Reserved.

初代浪花亭愛造（Wikipedia より）

「孝子の人情噺」、「滑稽噺蕎麦屋の笑」、「風土言葉の噺」、「待身音曲入滑稽噺」、「滑稽芝居稲川の夢」「江戸東京時代の噺」、「英日結婚の噺」、**「横浜居留地ミーラー」都古紫郎（共演）**（この話の内容は当サイト「歴史すぽっと」に、**「神奈川落語⑤　ミルラー事件関係」**として掲載されているので参照ください）、「俳優声色—幡随院長兵衛・白井権八」、初代三遊亭円右（共演）

特筆すべきは、浪曲のレコードとして、**初代浪花亭愛造**が残されていることである。ブラック自身は、浪曲と落語の合同興業も考えたようだが、三遊派の幹部からは、**「土場芸たる浪花節との共演はまっぴらこうむる」**と拒否されたそうである。

さらに、米ビクターにもブラックのレコードがあることが分かっている。

ただ、**当時の録音技術は低く**、様々な問題点があったため、貴重な記録ではあるが、**芸人本来の持ち味が出せていない**。動画サイトで、ブラックの落語のいくつかは、無料で視聴可能である。ガイスバーグによる録音は「全集・日本吹込み事始め」という 10 枚組の CD として発売されている。

チャールズ・ディケンズの「オリバー・ツイスト（Oliver Twist）」の翻案である「孤児（みなしご）」の表紙（1894[明治 27]年発表）　出典「参考文献」No. 6

## 7．ブラックの終焉

明治 30 年代の末頃から、青い目の落語家という売りも薄れ、人気が落ちて来る。ブラック自身は、弟ジョン・レディ 2 世のようにイギリスで教育を受けたわけではないし、妹のように、ずっと母のそばにいて、影響を受けたわけでもない。そのため、おまえは、イギリス人だと言われても、生まれは、オーストラリア、育ちは日本で、イギリスにいたこと

### ブラックが手がけた作品

ブラックが、落語家として、手掛けた落とし噺（オチのある話）、翻案物、探偵小説を紹介する。ブラックの創造性の豊かさが表れている。

**1　落とし噺**

もっとも、落語らしい落語は、オチ（サゲ）がある落語であるが、オチは、地口（ダジャレ）など、その言語と結びつくことが多く、違う言語を母語とする人には作りにくいと思うが、ブラックには、いくつか、落とし噺の作品もある。　ブラックが 1891（明治 24）年に雑誌『百花園』で発表したのが「英国の落話」、その段階では、地名も登場人物名も外国名だった。1904（明治 37）年に、雑誌『文芸倶楽部』に発表した改訂版が「ビールの掛け飲み」。そこでは、地名は、外国名だか、登場人物名は日本名、さらに、それを今村信雄（落語速記者・研究家）が落語「試し酒」で、地名、人物名ともに日本名にしたという。他に、1985（昭和 60）年の第一回快楽忌で先代圓楽が演じた「二人書生」、1905（明治 38）年に雑誌『文芸倶楽部』に発表された「煙草好き」がある。

**2　翻案物**

三遊亭圓朝の西洋人情噺の成功に刺激されて、ブラックも多数の翻案物を発表している。その中で、原典が知られているものが2つある。一つはメアリー・ブラドンの「花と雑草（Flower and Weed）」の翻案である「草葉の露」（1886[明治 19]年発表）と、チャールズ・ディケンズの「オリバー・ツイスト（Oliver Twist）」の翻案である「孤児（みなしご）」（1894[明治 27]年発表）がある。

**3　推理小説**

江戸川乱歩も評価したという推理小説には、乗合馬車内での毒殺トリックを扱った「車中の毒針」。法廷推理で、12 人の陪審が出てきて、自白ではなく、証人の証言を重視する西洋式の裁判を描いている「切なる罪」。ともに、1891（明治 24）年発表。拇印、爪印、手形などの指紋認証の必要性を説いたと言われる「岩出銀行血汐の手形（幻燈）」1892（明治 25）年発表。指紋をとりあげた小説としては、マーク・トウェーンの『ミシシッピ川の生活（Life on the Mississippi）』、1883 年に次いで古く、ハーバート・キャデット「指紋という手がかり（The Clue of the Finger-Prints）」、『新聞記者の冒険（The Adventure of Journalist）』所収 1900（明治 30）や、フリーマンのソーン・ダイク博士シリーズの「赤い拇指紋（The Red Thumb Mark）」が早いと言われていたが、それよりも早くに出されている。他に、パリが舞台で、皇太子を毒殺しようとする「薔薇娘」1891（明治 24）年発表。洋犬を犯人探しに使う「剣の刃渡」1892（明治 25）年発表がある。なお、警察犬制度が本格的に施行されたのは、1901（明治 34）年のドイツが最初で、日本では、戦後になってからである。

Copyright© 横浜歴史さろん Yokohama History Salon. All Right Reserved.

がないということもあり、イギリス人ということに、それほど、強いアイデンティティを持てなかったのではないか、だからといって、純粋な日本人でもないため、自分の居場所であった三遊派の落語家仲間ともしっくりいかないこともあった。また、前述のように、兄が芸人であることを嫌う弟に高座を下ろされ、口論となった時も、芸人は決して賤しまれる存在でなく、人気を現わす番付でも自分の名前は上位にあり、自分は、尊敬を集める存在になっていると主張し、心の拠りどころとしていたが、その人気に陰りが出たことは、彼を追い詰めたようだった。1908（明治 41）年に、兵庫の寄席「恵比寿亭」での**自殺未遂にいたった**。その後は、弟子で、養子でもあるホスコ夫妻の一座に加わって手品を披露したり、晩年は、上方で活動弁士をしていたようだ。

快楽亭ブラックの墓（山手外国人墓地）

関東大震災直後の 1923（大正 12）年 9 月 19 日、目黒の自宅で脳卒中のため 66 歳の生涯を閉じた。墓所は、山手外国人墓地で、両親、妹と一緒に眠っている。

多才多芸なブラックではあったが、始めは物珍しさから面白がられ、人気を博してはいたが、落語界にあっては日本人ではないハンディもあって、噺家としての能力には限界があり、人気を維持できなかったように思える。

こうして彼の人生を辿ってみると、現代とは全く違って閉鎖的だった日本の社会で、最後まで芸人として生き抜いた「快楽亭ブラック」に、「よく頑張った！」と、ねぎらってやりたいと思う。

「参考文献」

1.「横浜ゲーテ座―明治・大正の西洋劇場―」　升本匡彦　岩崎博物館出版局　1986 年
2.「古き横浜の壊滅」　O.M.プール著　金井圓訳　有隣堂　1976 年
3.「横浜外国人墓地に眠る人々　開港から関東大震災まで」　斎藤多喜夫　有隣堂　2012 年
4.「快楽亭ブラックの「ニッポン」青い眼の落語家が見た「文明開化」の日本と日本人」　佐々木みよ子、森岡ハインツ著　二十一世紀図書館 0078　PHP　1986 年
5.「決定版快楽亭ブラック伝」　小島貞二　恒文社　1997 年
6.「快楽亭ブラック」　イアン・マッカーサー著　内藤誠・堀内久美子訳　1992 年
7.「快楽亭ブラック研究（二）～（六）」快楽亭ブラック研究会編　生出俊哉発行　1988～92 年
8.「彩色絵はがき・古地図から眺める横浜今昔散歩」　原島広至著　中経の文庫 2009 年
9.「横浜市史稿　風俗編」横浜市役所編纂　臨川書店　1985 年

◎次ページの「快楽亭ブラック」略年表は、本来「参考文献」の前に置かれるべきですが、ページの都合上、後に置きました。

Copyright© 横浜歴史さろん Yokohama History Salon. All Right Reserved.

「快楽亭ブラック」略年表

| | | |
|---|---|---|
| 1858 | 安政 5 | オーストラリア、北アデレード市に生まれる |
| 1865 | 元治 2 | 英国蒸気船グラナダ（Granada）号で母と共に、横浜港に来日 |
| 1872 | 明治 5 | 家族と共に、横浜から東京芝増上寺近くに引っ越す |
| 1876 | 明治 9 | 浅草の寄席に手品で出演。柳川一蝶斎の一座に加わる |
| 1877 | 明治 10 | 二世松林伯圓に言われて、富竹亭に飛び入り出演 |
| 1878 | 明治 11 | 富竹亭支配人竹内竹次郎に請われ、系列の寄席清竹（馬車道）の初席にレギュラー出演。『チャールズ一世伝』『ジャンヌ・ダルク伝』 |
| 1879 | 明治 12 | この頃「ナポレオン論」「日本開化論」「治外法権論」「吉原可廃之論」「日本政体論」「陪審論」「租税論」など演説活動をする |
| 1880 | 明治 13 | 放牛舎桃林の一門に加わり、軍談をする |
| 1886 | 明治 19 | 英語教師になる。京橋区宗十郎町（中央区銀座通り七丁目）に英語学校を開く。翻案物『草葉の露』発表 |
| 1887 | 明治 20 | 英会話本『容易独習英和会話篇』刊行 |
| 1888 | 明治 21 | 三遊派の五厘圓之助に誘われ三遊派に加入 |
| 1889 | 明治 23 | この頃より芝居に出るようになる |
| 1891 | 明治 24 | 快楽亭ブラックとなる。<br>推理物『車中の毒針』発表。落とし噺『英国の落とし噺』の発表 |
| 1892 | 明治 25 | 浅草猿屋町石井みねの養子となる。推理物『血汐の手形』。<br>春木座で講釈芝居において、幡随院長兵衛をつとめる |
| 1893 | 明治 26 | みねの養女アカ（18）と結婚、帰化し、石井貌刺屈となる。<br>コピーライターの看板を掲げる |
| 1895 | 明治 28 | 弟ジョンに高座から引きずり降ろされる。アカと離婚 |
| 1896 | 明治 29 | 内弟子を置く。この頃、ホスコ（石井清吉）を養子に迎える。<br>浅草座新派伊井容峰一座に加入。伊井＝権八、ブラック＝長兵衛 |
| 1903 | 明治 36 | 英国グラモフォン社のガイズバーグ一行が、出張録音に来日。芸人の手配をつとめ、自らも 9 枚吹込む。<br>吉慶堂李彩、浪花亭愛造と『日英清三国同盟演芸会』 |
| 1904 | 明治 37 | 『ビールの賭飲み』（前記『英国の落とし噺』改訂版）発表 |
| 1905 | 明治 38 | 神田日梅亭で催眠術を披露。落とし噺『煙草好き』 |
| 1908 | 明治 41 | 兵庫の寄席『恵比寿亭』で自殺未遂 |
| 1923 | 大正 12 | 白金三光町の自宅で死去（66 歳） |

Copyright© 横浜歴史さろん Yokohama History Salon. All Right Reserved.